

『東京の下町 山谷でホスピス始めました』 山本雅基 講談社 二六〇円

高齢の路上生活者ら行き場を失った人々が、自分らしく最期を過ごせる施設をつくりたい

。そう思い立った

著者が、東京都台東区の子谷地区にホスピスを建てるまでと、オープンしてからの怒涛の日々をつづった。

入居者は、いわゆる人生の「負け組」とも言える二十一人。元ヤクザや元芸者、素性を明かさぬ人などさまざま。女性が大好きで、女性スタッフの名前を飾り絵で描いたり、女性の前では身きれいにすることに

社会問題



気を配っていた竹村さんは、死ぬ直前に大好きなお風呂に入れてもらい、女性たちに見守られて満足そうに亡く

なった。死が近づくと手助けを拒否し、一人でいたいと言った秋本さんは、最期も一人で逝きたかったのだ。それぞれの人生のラストシーンにどう寄り添うか。試行錯誤しながら、この大きな課題に取り組む著者らスタッフの奮闘や思いがリアルに描かれている。

(四戸咲子)